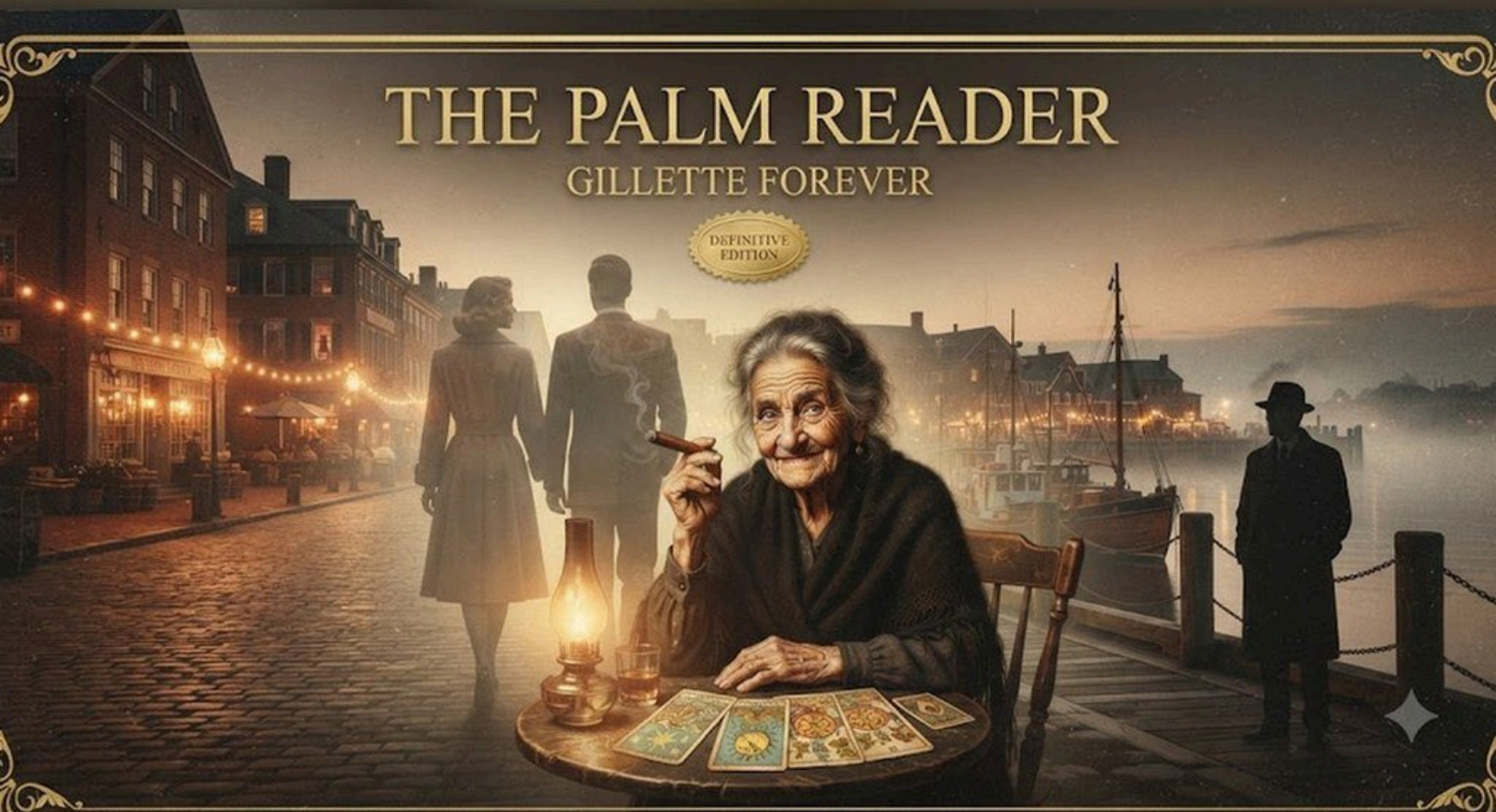


THE PALM READER

GILLETTE FOREVER

DEFINITIVE
EDITION



Wall Streetの手相見 ― 続編II

マイアミへ戻る計画は立ててあった。

6か月。

休んで、スペイン語を磨いて、キューバ女を間近で研究するには十分な時間だ。

昔から、私のいちばん好きな獲物だった。

スーパーマーケットに入ると、運命がカートより先にそこへ着いていた。

目の前に、女がひとり現れた。

キューバ人。

すぐに誰だかわかった。

向こうも私だとわかった。

数秒、じっと私を見つめた。

それから言った。

「あんた、ここでいったい何してるの？」

「買い物だ」

「違う。この地上で、ってこと。もう地獄にいるはずじゃないの？」

私は彼女の英語を褒めた。

完璧だ。

最高の女はいつも、同時に2人の人間でいられる。

情報が欲しいときは優しく、

手に入れたとたんに容赦がない。

元気なの、と彼女は訊いた。

体の具合はどうなの。

そもそもどうしてまだ生きているの。

奥さんはどこ。

そして何よりも。

「どうやって若いままで、悪魔そのものを打ち負かしたの？」

バスに乗らなければならない、と私は言った。

それは本当だった。

どこ行きかは言わなかった。

別れを告げ、姿を消した。

...

家に戻ると、たちまち眠りに落ちた。

夢の中で、誰かがイタリアの私の家の階段を上ってくるのが見えた。

知っている男だ。

いや、知らないのかもしれない。

そこで、はっとした。

あいつだ。

シンシナティのインド人。

署名入りの1ドル札の男。

いちばん上の段まで来た。

私を抱きしめた。

ある種のインド人がイギリス人よりも見事に着こなす、あのイギリス流の落ち着きで微

笑んだ。それから、真顔で私を見た。

「フレーガ、すまないが — お手洗いはどこかな？」

私ははっと目を覚ました。

バスルームの扉を探しに行った。

それから、まだ夢の中にいるのだと気づいた。

振り返った。

赤い肘掛け椅子は、ふさがっていた。

またあいつだ。

ボストンの幽霊。

笑っている。

「怖がってないのはわかってた。お前はタマのある男だ」

それから、隣にいる誰かを指さした。

「誰を連れてきたか、見てみろ」

...

背の高い女。

エレガント。

アメリカ人。

40歳くらい。

幹部の身のこなし。

他人の人生を終わらせる書類に署名する人間のまなざし。

彼女は手を差し出した。

「著作権局。ワシントンD.C.」

私はうなずいた。

「たいした出世だ。どうしてこんなところへ？」

「あなたからメールが届いたの」

「それで？」

「読んだわ」

「それで？」

「心臓がもたなかった」

幽霊は吹き出した。

私は笑わなかった。

「すまない」

「謝らないで」

「いや、本当に」

「いいえ、本当に — 私のほうこそ」

...

彼女は腰を下ろした。

部屋を観察した。

私を観察した。

それから言った。

「あなたは、私が一生待ち続けてきた人よ」

「人に会うにしては、ずいぶん込み入った仕組みだな」

「見つけられたなかで、いちばんいい方法だったの」

「いや。信じてくれ。いちばんいい方法じゃなかった」

彼女はしばらく黙り込んだ。

それから私は、ただひとつ肝心な質問をした。

「著作権局の前は — どこで働いていた？」

「アメリカの多国籍企業。洗剤よ」

「どうだった？」

「目標を達成するには、死ななきゃならないの」

「というと？」

「文字どおりよ。破裂するまで働かせるの」

...

私は黙っていた。

それから微笑んだ。

「気の毒に、お嬢さん」

「何が？」

「選ぶ次元を間違えたね」

「何ですって？」

「人生は、いつだって — いつだって、ただ — スタイルの問題なんだ」

私は窓を指さした。

地球はまだそこにあった。

混乱して。

騒々しく。

問題だらけで。

「私は誰の話でも聞く」

「幽霊の話でも？」

「幽霊ならなおさらだ」

「じゃあ、どうして私たちと一緒に来ないの？」

「この下界で、まだ片づけることがあるからだ」

ボストンの幽霊はうなずいた。

幹部は目を伏せた。

がっかりしたようだった。

...

私は立ち上がった。

扉まで歩いた。

それから振り返った。

「ところで —」

「何？」

「実を言うと、私も洗剤をやっているんだ」

「それで？」

「ただし、目標を達成するのに誰かが死ぬのを待ったりはしない」

幽霊は腹を抱えて笑った。

彼女は微笑んだ — 初めて。

ふたたび目を開けたとき、私はひとりだった。

部屋にはもう誰もいない。

幽霊もいない。

幹部もいない。

バスルームを探すインド人もいない。

赤い肘掛け椅子だけ。
まだ私を見ている。
次の夜に誰が来るのか、もう知っているかのように。

フェルディナンド・フレーガ